「トマスの信仰」

ヨハネによる福音書２０章２４－２９節

森島　牧人　牧師

先日、私たちはイースターを喜び祝いましたが、この主イエスの復活の喜びが弟子たちや人々にどのように伝わって行ったのか、今日は「トマス」という人物の信仰の遍歴を通して考えて行きたいと思います。

今日の聖書箇所は、トマスと聞いて誰もが思い浮かべる場面です。「他の弟子たちが、『わたしたちは主を見た』と言うと、トマスは言った。『あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。』」（ヨハネ２０：２５）と書かれています。

トマスは十二弟子の中の一人ですが、聖書にはそんなによく出くるわけではありません。しかし登場する場面のいずれもが重要なところとなっています。聖書によれば、彼は弟子たちの中でも内向的・悲観的な傾向にあったようで、物事を信ずるのにも極めて慎重でした。しかし一方では、一旦物事を確認すると、心をこめて、自身の存在をもってそれに打ち込み、他の弟子が言えないことをも大胆に口にするという気質でもあったようです。

主イエスを深く愛していた彼は、また知的にも非常に豊かな人物で、物事を鋭く切り取って発言していますので、筋の通らないことにはイライラすることもあったようです。捕縛の時の近づいた主イエスが、これから御自身の上に起こることを語って「わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」と言われた時、弟子たちの殆どが真面目に聞いていない中、トマス一人が「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるでしょうか。」と、詰問するように主イエスに聞き返しています。（同１４：５）知力には鋭いものがあったのに、霊的な部分の想像力がまだ眠っている状態だったと言えるのでしょう。

そのような気性のトマスでしたから、主イエスが罪人と同じ死を遂げられたことへの絶望は測り知れないほど深いものだったと考えられます。何も信じられない、誰とも会いたくない、話したくない・・・腑抜けのようになった彼は仲間と離れ、放浪の一週間を過ごしていました。しかし八日目、彼は弟子たちの潜んでいる二階の座敷へ顔を出します。ペトロやエマオの二人、マグダラのマリアなどが復活の主に出会った話を聞かせますが、彼は頑としてそれを受け入れなかったのでした。

聖書には「さて、八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸には鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち・・・。それからトマスに言われた。『あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。』トマスは答えて、『わたしの主、わたしの神よ』と言った。」（同２０：２６－２８）とあります。

つまり、栄光の位を捨てて人の子となり、人間のレベルである地上まで降りて来られた主は、ここでも哀れなトマスのレベルまで降りて彼の手を取り、彼の手を霊的な手に変えられたのです。その瞬間、それまでの実証主義的なトマスの姿は消え、霊的感覚の燃え上がるトマスがそこにいました。霊的な手で主に触れるトマス・・・、彼はそれで十分でした。霊的な力によって新たに信頼・服従の思いに満たされた彼は、感極まって「わたしの主、私の神よ」と短く叫びます。今も読む者を感動させる彼のこの短い叫びこそ、百万千万の言葉に勝る彼の信仰告白でした。

信仰告白というと私たちはペトロの「あなたはメシア、生ける神の子です」（マタイ１６：１６）を思い出します。ペトロのこの告白を受けた主イエスは、ペトロ（岩）を祝福し、彼の信仰告白の上に、主がその中に存在される教会が成立することを予告されましたが、誰をも驚かせた実証主義的で霊的には全く鈍かったトマスの信仰告白を聞かれた復活の主イエスは、ペトロのそれと同様に、大変喜んで受け入れられたのでした。

ヘブライ１１：１に「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。」とあります。トマスは復活の主に出会い、その御言葉に聞き、具体的にも霊的に主に触れて、それまでどうしても理解出来なかったことを、頭によってではなく、心で理解することが出来たのです。彼はまさに「信仰は見えない事実を確認すること」との思いに立ったに違いないと思われるのです。

（説教要約　羽入田悦子）